

司馬光の少年期における家庭環境と教育

稲 葉 一 郎

はじめに

北宋時代の司馬光については、一面では古今の名著『資治通鑑』の編者として、他面では舊法黨の領袖として新法の立案・施行者の王安石に對決したことで周知知られている。司馬光を歴史的に價值づけるこれらの事業なり行動は、彼の生涯の後半期に屬するものであるが、或は『資治通鑑』の敘述の基本的な立場にしても、或は舊法黨的な政治的立場にしても、司馬光の主張の中には、官僚としての體驗と學習を踏まえたものばかりではなく、當然のことながら成長過程で身につけた慣習や生活信條も含まれているように思われる。換言すれば彼の成育した家庭環境および郷里の風土から得た慣習や生活信條を思想の基盤とし、その上に後年修得した知識や主張が組織されて司馬光という歴史家・政治家の獨自の思想體系が構成されていると見ることができる。

これまで司馬光は王安石の新法に反對し、政權を握るや新法に屬する諸制度を次々と廢止していったところから、保守的・消極的な政治家と見做されてきた。しかし本當に單なる守舊的で消極的な思想の持ち主だったのか、或はまた何故にそのような立場を取らざるを得なかったのか、については、從來、十分な説明が加えられなかったように思

われる。彼には彼なりの政見があり、政治改革のプランがあったことはいうまでもない。

そのような問題を解明するためには、迂遠ではあるが彼の生まれ育った家庭環境から説き起こす必要があるであろう。また官僚としての體驗、思想家たちとの交流が政治家としての、また歴史家としての立場を鮮明にし輪郭を大きくしていった経過についても觸れなければならないであろう。司馬光の主張の諸要素を解明するには、彼の生涯のそれぞれの時期における色々な側面に光を當てるのが有効であるように思われる。

上のような問題意識の下に、司馬光の生涯を幼少年期、改革派官僚期、舊法黨官僚期の三つの時代に分ち考察を加えていくことを計畫している。この稿では幼少年期を取り上げ、司馬光の思想の基盤をなす生活信條の形成過程について見ることにする。

なお稿を草するに當っては、古典的な顧棟高『司馬溫公年譜』、近人の著述として顧奎相『司馬光』（黑龍江人民出版社、一九八五年）、宋衍審『司馬光傳』（北京出版社、一九九〇年）、程應穆『司馬光新傳』（上海人民出版社、一九九一年）などを参照した。特に宋氏『司馬光傳』は詳細であり、本稿も宋氏の記述に啓發されたところが少なくない。

一 郷里涑水郷と司馬氏

鹽池で有名な解州の東北、今日なお傳説と歴史のはざまにある夏王朝の故地、安邑。そして惡名高い暴君（夏の桀王と聖人（殷の）湯王の決戦の地、鳴條。これらの上古の歴史の舞臺が司馬光の故郷である。

司馬光の屬する司馬氏の本貫は（山西）陝州夏縣涑水郷にあった。陝州夏縣はもと安邑に屬したが、北魏時代にその東北部を分離して置かれた縣である。涑水郷は、夏縣城の西二十里にあり、その西十里に涑水を控えた比較的肥沃

な土地である。また涑水は絳縣横嶺山乾洞に源を發して西南流し、鹽池を左に見て黄河に注ぐ⁽¹⁾ 河川であり、季春から初秋の間のみ水を湛え、季秋以後は干上がつて涸河となる特性をもつという⁽²⁾。

涑水郷の司馬氏の祖塋の地は鳴條岡と呼ばれる。司馬氏はこの由緒ある古戰場を墳墓の地とし、その山下に居處を構えたものである⁽³⁾。當の司馬氏は、晉朝の皇族、好學で知られ經史に通じた安平獻王の司馬孚（懿の次弟）を祖先とし、その裔孫、征東大將軍司馬陽の子孫とされている⁽⁴⁾。司馬陽が涑水郷瀾涸曲に葬られてより、この地に定住して子孫を繁茂させ⁽⁵⁾、幾つかの集落に別れて生活していた。坡底村、司馬村、或は大小晁村などが司馬氏の居住した集落として知られている⁽⁶⁾。司馬光の屬する司馬家は涑水東岸の坡底村にあり、あまり大きくない農地田産を據り所に農業畜産に従事していた。この司馬家が官僚を出し學業に力を入れるようになるのは光の祖父炫の時からである⁽⁷⁾。

北宋時代の前期に司馬家を差配した、司馬光の父池の從兄弟、司馬浩や司馬沂の墓誌の記載などによってその生活を窺うと、「司馬氏、累世聚居し、食口は常に數十を減ぜず」⁽⁸⁾とあり、數代の血縁家族を鳩集し、數十人からなる累世同居の生活を營んでいた⁽⁹⁾。この大家族を養うに當たっては、家長の指導の下、「必ず禮法を謹守して以て羣子弟および家衆を御し、之に分つに職を以てし、之に授くるに事を以てして其の成功を責む」⁽¹⁰⁾といい、分業體制を布き個々の家族員にそれぞれ適した事業を擔當させ、成果を期した。そして「未だ嘗て商賈奇袤の業を爲さず、一に田畜に出ずるのみ」⁽¹¹⁾といい、あくまでも商業などで利潤追求に走ることを避け、田産・畜産を活用して生産に勵み、しかも「田、廣きを加えず」⁽¹²⁾、すなわち田地を擴張することなく、寧ろ自給自足形態に近い農業經營を進めていたものようである。このような經營方針を採る限り、この家族にとって貨幣収入は極めて貴重である。されば「財用の節を制し、入を量りて以て出を爲し」「冗費を裁省し奢華を禁止して、常に稍や贏餘を存し以て不虞に備える」⁽¹³⁾ことに努めるの風があった。家族員の不時の所得も家産に組み込まれた。司馬池が早く父を失い、（司馬家の世話になるに際し

て、父炫が在官時代に蓄えた^(a)遺産數十萬を悉く諸父に推譲した^(b)というのも、諸父に個々に分配したのではなく、寧ろ家産に組み入れたものと理解すべきであろう^(c)。複合家族の生活形態を採っていたことからすれば、個々の家族員は共同生活を推進する上でも、所得を集中的に管理し、家長の方針に従い無駄な家計支出を極力抑え、合理的な農業經營に従事し、相互に家族秩序と精神的紐帶（禮敬）の維持に努めていたもの^(d)と見られる。ここでは家族員相互の忍耐と協力が不可欠である。

初め司馬家を取り仕切っていた司馬沂については、家政に對する經營努力によって父兄、すなわち家族員を衣食の上で満足させるに至ったが、沂自らは一生惡衣疏食で通したといい、沂の後を繼いだ司馬浩も家族員が「始終、絲毫も家貧しきを怨言することのない」ように努めたという^(e)。また一家の寡婦も孤兒も彼らの配慮で家族員として平等の扱いを受け、豊かではないにしても衣食ともに適切な配分を受けたという。こうした家政では分配の公平が大原則であり、勤儉節用こそが家族員の生活のモットーにならざるを得ない。

教育も家長の重要な仕事であり、これには教養のある家族員も共同で當たったものと思われる。一説によれば司馬光も衆兄弟と羣居講習した^(f)といい、特に卓れた少年（司馬里）には、孤兒でも家長が特別の教育を授けることがあった^(g)。多くの家口を擁しその秩序と精神的な紐帶を維持するためにも、また學業を達成させるためにも、禮教、すなわち儒學の教育は不可欠の仕事であつたらう。

家長の仕事は日常生活の管理だけではない。司馬浩は手狭になっていった墓地を擴張してこれまで未葬の状態にあつた尊卑長幼二十九體の墳墓を造營している^(h)。家族員の死後を鄭重に處理するのも家長の仕事であつた。

しかしながら司馬氏の家長の仕事は一家の事業經營に終始するものではなかった。周囲の田畑を潤っていた涑水は、黃土地帯特有の風土の影響でこれまでも數ば淤塞し水利に支障を來したことがあり、當時も淤塞が甚だしくなつたので、司馬浩は郷人を率いて縣官、すなわち役所に赴き役人を動かして、涑水の水を再び利用できるよう灌漑施

設を整備している⁽⁶⁾。いわゆる司馬堤がこれである。また司馬沂は家族の生活が安定すると、「時に餘力あれば則ち其の郷人に及ぶ」⁽⁷⁾とされ、郷里の人々の救済・福祉にも盡力した。

司馬光がこれらの事業に従事して司馬家を維持してきた諸父たちを、或は友人王安石の筆を借りて、或は自ら筆を執って後世に伝えようとしたのは、彼らの生活態度に共鳴し、そこから自らの生活信條を修得していたからに外ならない。後年、司馬光が大家族の生活規範として『書儀』なる書物を著わすのも、自己の生活信條の根據になった彼らの生活態度と經營方針を形あるものとして残しておこうと考えたからであろう⁽⁸⁾。

司馬氏の傳統的な家政の經營方針と生活信條がこのようなものであるとすれば、後年の司馬光の政治思想や政策の基本的な立場もこれと切り離して理解することはできないであろう。大家族を維持するための家族規範や經濟觀念、生活信條など、少年時代に植え付けられた諸觀念が司馬光の政治思想の基盤になっているのである。

注

(1) 『光緒夏縣志』卷一、輿地志によれば、

涑水在（夏）縣西三十里、源出絳縣橫嶺山乾洞。伏流地中復出、西經聞喜縣境、至安邑合姚暹渠、入五姓湖、歷猗氏・臨晉、過蒲州孟明橋入黃河。

とある。

(2) 宋衍審『司馬光傳』（前掲）十二頁を参照。

(3) 馬永卿『嬾真子』卷四によれば、

司馬溫公祖坐在陝府夏縣之西二十里、地名鳴條山、有墳寺曰餘慶。山下即溫公之祖居也。僕爲夏縣令日、屢至其處。及十許里有涑水、故溫公號涑水先生。鳴條山即湯與桀戰之地、去解州安邑縣五十里、乃桀之都也。

(4) 『晉書』卷三十七、列傳卷七、宗室によると、

安平獻王孚、字叔達、宣帝次弟也。（中略）孚溫厚廉讓、博涉經史。漢末喪亂、與兄弟處危亡之中、簞食瓢飲、而披閱不

司馬光の少年期における家庭環境と教育

司馬光の少年期における家庭環境と教育

僦。性通恕、以貞白自立、未嘗有怨於人。（中略）及武帝受禪、其封爲安平王、邑四萬戶。

とあり、孚の後、世孫兄弟が襲いだが、咸寧二年、隆の死後、子なく國が絶えたという。司馬氏は、永嘉の亂に際しては、多くが南徙したが、しかし桓玄・劉裕の迫害を逃れて五胡の地に舞い戻ったものもあった。例えば『魏書』卷三十七、列傳卷二十五には、

司馬叔璠、晉安平獻王孚之後也。父曇之、司馬德宗河間王。桓玄・劉裕之際、叔璠與兄國璠北奔慕容超。後西投姚興。劉裕滅姚泓、北奔屈丐。世祖平統萬、兄弟俱入國。國璠賜爵淮南公、卒、無子、爵除。叔璠、安遠將軍・丹陽侯、卒。

とあり、このような事例から推測すると、司馬光の祖先に當たる征東大將軍司馬陽も司馬叔璠兄弟のように、五胡または北魏時代に北徙したのかもしれない。

(5) 『宋史』卷二九八、列傳卷五十七、司馬池傳によると、

司馬池、字和中、自言晉安平獻王孚後、征東將軍陽葬安邑瀾洞曲。後魏析安邑置夏縣、遂爲縣人。池少喪父、家貲數十萬、悉推諸父、而自力讀書。

とあり、北魏時代になって安邑の北部を分析して夏縣としたため司馬氏は夏縣人となったという。

(6) 宋氏『司馬光傳』（前掲）十四頁を参照。

蘇軾「司馬溫公行狀」〔『蘇軾文集』卷十六〕によると、

曾祖政、贈太子太保。（中略）祖炫、試祕書省校書郎、知耀州富平縣事、贈太子太傅。（中略）自高祖・曾祖皆以五代衰

亂不仕。富平府君始舉進士、沒於縣令。

とある。

(7) 「駕部員外郎司馬府君墓誌銘」〔『傅家集』卷七十七〕によれば、

司馬氏累世聚居、食口常不減數十。（中略）兄年十六、衛尉郎以家事委之。衣食均贍、宗族無間言。

とある。

司馬光は父の轉任に従って各地を轉々としたが、時折、涑水司馬家でも生活することがあったらしく、また後の五年に及ぶ父母の服喪期間中、司馬家にあってそこに傳わる家族規範と生活信條を受け容れるようになったようである。後年の彼も思想・政見の理解に資する意味でも、彼に影響を與えた一族の處世を見ておく必要がある。

初め司馬家の家政を取り仕切った沂については、司馬光の筆に成る「故處士贈都官郎中司馬君行狀」〔『傅家集』卷七十九〕

に詳しい。また嘉祐六年、ともに修起居注の職にあった王安石が、司馬光の依頼を受けて撰述した「故宋贈尚書都官郎中司馬君墓表」(『光緒夏縣志』卷十、藝文志および『山右石刻叢編』卷十四)は「行狀」よりも簡潔に整理されている。ここでは詳細な「行狀」の記載を挙げておこう。

曾祖林、祖政、父炳、皆不仕。君諱沂。陝州夏縣涑水鄉高塋里人。其先出於晉安平獻王。至征東大將軍陽始葬於河東安邑涑水之南。後魏孝文帝太和中、分安邑爲夏縣、遂爲夏縣人。／自唐以來、仕宦陵夷、降在畎畝。然累世兄弟未嘗異居。故家之食口甚衆、而生業素薄、無以贍之。／君幼而孝謹、諸父兄悉以家事委之。君於是治田疇、繕園圃、修闢筮、完園倉。雖有傭保、必以身先之、使莫敢不盡力者。夜則側板而枕之、寐不熟輒寤。當是時田不加廣而家用饒。又未嘗爲商賈奇袤之業、一出於田畜而已。諸父兄皆醉飽安佚、而君無故不親酒肉。遇鄉人之匱乏者、或解衣以濟之。年三十二、以景德三年十二月丙子、終於家。(中略)待制府君常歎曰、自吾兄之亡、而家遂貧。豈所以資生之具減於昔日、勤惰不同而已矣。／嗚呼、使天下之民皆若吾兄之爲、雖古治世、何以加。惜其無位而才不大施也。

と。なお王安石の墓表では末尾の記述を、

而司馬氏富、父兄悉醉飽安逸。而時有餘力、則及其鄉人。然君遂以惡衣疏食終身。其卒也以景德三年十二月丙子、年三十二。(中略)嗚呼君所謂謹身節用以養父母、而道行於妻子者歟。

としている。沂の没後、その後を繼いで司馬家の家政を差配したのはその兄の浩である。光の作った墓表(贈衛尉少卿司馬府君墓表『傳家集』卷七十九)によると、

府君諱浩、於司徒公爲從父兄。其鄉里先世見於祖墓碣。曾祖諱某(林)、祖諱某(政)、父諱某(炳)、皆不仕。／府君少治詩、以學究舉凡八上、終不遇。遂絕意不復自進於有司、專以治家爲事。爲人魁岸慷慨、尙氣義、於宗族恩尤篤。司馬氏累世聚居、食口衆而田園寡。府君竭力營衣食以贍之、均壹無私。婦孺孤兒、皆獲其所。凡數十年、始終無絲豪怨言家貧。／祖墓迫隘、尊卑長幼、前後積若干(二十九)喪、久未之葬。府君履行祖墓之西、相地爲新墓、稱家之有無、一旦悉舉而葬之。／弟子里早孤、府君識其偶異、自幼教督甚嚴。其後卒以文學取進士第、仕至太常少卿、所至著名迹。／前此鄉人導涑水以溉田利甚博、歲久岸益深峭、水不能復上、田日饒薄、將不足以輸租。府君帥鄉人言縣官、始請築塢於下流、水乃復行田間爲民用、至于今賴之。天聖八年四月癸巳、終於家、年六十三。

といい、最初、舉業に精を出していたが、遂に諦めて家政に従事するようになったとある。これら司馬浩と沂の家政こそは司馬氏の生活様式を端的に示すものと考えられる。

司馬光の少年期における家庭環境と教育

- (10) このような生活様式と慣習は後に司馬光によって『書儀』の中に文章化されるに至った(注(13)を参照)。そこでは家長の權能について、

凡爲家長、必謹守禮法、以御羣子弟及家衆、分之以職、授之以事、而責其成功。制財用之節、量入以爲出。稱家之有無、以給上下之衣食及吉凶之費、皆有品節而莫不均壹。裁省冗費、禁止奢華、常須稍存贏餘以備不虞。(卷四、「居家雜儀」)と規定されている。これらの規定は司馬浩や沂の家政を理解する上で参考にならう。

- (11) この點についても『書儀』の中に規定がある。すなわち、

凡爲子婦者、毋得畜私財。俸祿及田宅所入、盡歸之父母舅姑。當用則請而用之、不敢私假不敢私與。(卷四、「居家雜儀」)と。『禮記』内則の記載を参考に家産の利用に關する規定を設けている。司馬家の一員に加わる以上は家法に従う義務があったのであらう。

- (12) 『三朝名臣言行錄』卷七、司馬文正公の條には『呂氏家塾記』を引いて、

司馬溫公幼時、忠記誦不如人。羣居講習、衆兄弟既成誦、游息矣。獨下帷絕編、迨能倍誦乃止。用力多者收功速、其所精誦乃終身不忘也。溫公嘗言、書不可不成誦、或在馬上、或中夜不寢時、詠其文思其義、所得多矣。という。恐らく一つの中庭を共有する従兄弟たちが一室に集められ教育を受けていたものと考えられる。

- (13) 『書儀』については、司馬光自身の執筆目的や経緯などの説明を缺いているが、例えば『朱子語類』卷八十四、禮一、「論後世禮書」には、

(胡)叔器問四先生禮。曰(中略)溫公則大概本儀禮、而參以今之可行者。要之溫公較禮、其中與古不甚遠、是七八分好。云々。

とあり、『書儀』卷四、「居家雜儀」に、

吾家同居宗族衆多。冬正朔望、宗族聚于堂上。丈夫處左西上、婦人處右東上、皆北向共爲一列、各以長幼爲序。

というような記述があるのを見ると、司馬家の作法を下敷にして書かれていることは明らかであり、朱熹の「參以今之可行者」とは司馬家の作法を意味するものと理解して差支えないであらう。

二 家族と幼少年期の教育

司馬光は字を君實といい、三代皇帝眞宗の元禧三年（一〇一九）十月十八日、司馬池と夫人聶氏の三男として河南・光山縣に生まれた。光の上には十三歳年長の長兄旦（字伯康）、姉、次兄望が生まれたが、望は夭逝したので、光は次男として扱われた⁽¹⁾という。司馬池四十一歳の子である。當時、池は知光山縣の職にあり、その官舎で生れたので、任地に因んで光と命名されたものであるという⁽²⁾。

涑水郷の司馬氏が官僚を出したのは光の祖父の炫からであることは先に觸れた。炫は、天下を平定して間もない宋朝の、人材を求める取士の擧に應じ、進士に及第して耀州富平縣令となった。しかし官僚として榮達するに至らずして亡くなった。父の池は、早く父を失ったので諸父に養われたが、既に勉學の基礎はできていたためか、諸父を煩わすことなく自ら讀書に努めた。やがて進士に及第して官界に入ったが、地方官勤務が多く、晩年の一時期、尚書工部郎中・戸部度支鹽鐵副使、吏部郎中・天章閣待制を勤めたに過ぎない。

彼が司馬光に残した遺産といえは、彼の人格形成と教養の基礎作りを助けたことの外、官界に人脈を作り、高級官僚への榮達や思想の發展に道を開いたことであろう。後年の人事を先取りして列擧するならば、友人で後の禮部尚書張存に謀りその三女を進士に甲第した子息光に娶らせたこと、また友人で後の樞密使・宰相の龐籍に光を紹介したと（後に光を地方官から中央政府の要職に拔擢することになる）、同じく友人で後の翰林學士の孫甫にも光を引き合わせたこと（後に同じく歴史敘述に關心をもっていた光に方法論を懇切に教示することになる）などが指摘できる。

光に對して一層大きな影響力をもったのは長兄の旦である。司馬旦傳⁽³⁾にも、「弟の光と尤も友愛もて終始し、人、間言するなし」とあり、十三歳年長の旦は終始、弟の光に愛情をもつて接し、それは光の死まで續いた。光も年老い

た兄に對して「之を奉ずること嚴父の如く、之を保んずること嬰兒の如し」(『宋史』司馬光傳)であつたという。また「凡そ光の平時、ともに論ずる所の天下の事、且、これを助けるあり」とあり、常に光の相談相手を務めていた。十三歳という年齢差や上に紹介した事例などから推測すれば、幼時からの光の教育の一翼を擔っていたと見て間違いないであろう。晩年、光が門下侍郎への就任、すなわち政權の擔當を高太后から要請され、固辭し續けていた時、それを翻意させたのも兄の且であつたことからすると、光の行動には陰に陽に司馬且の助言が支えになっていたことが知られる。

且は父池の任子によって官界に入り、祕書省校書郎・鄭縣主簿を皮切りに官を歷ること十七、太中大夫にまで昇進し、熙寧八年に致仕(引退)したが、傳えられる性格は「清直敏強にして小事と雖も必ず審思し、度りて中らざれば釋かず」とされている。清廉實直、小さな事でも必ず眞劍に當たり、満足する結果が得られなければ止めなかつたというのである。また「且の郡を治するや大體あり。施設する所は理に適い事に便なるに取る」、すなわち地方官としての施政方針は義理に適っているかどうか、實情に合うかどうかを基準にして決定したという。更に「且、人と交わるに信義を以てし、其の急を周うを喜こぶ」とあり、信義を尊重し人の困窮を救うのを喜びとしていたというから、仁義に篤い性格であつたのであらう。いづれ判明することになるが、これらの性格は且獨自のものではなく、光にも共通するものである。特に忍耐強く粘り強い性格は且・光兄弟共通の性格に止まらず、司馬家に共通のものと見ることも可能である。

司馬家の、躰を含む廣義の教育に關しては「慎しむはその始にあり」とて幼少時から禮の規定に従つて厳しく躰ける家法があつた。光の幼時における廣義の教育についても、後年、光自らの誌した實話が傳えられている。すなわち五六歳の頃、光が青い胡桃を弄んでいると、姉が光のためにその皮を剥こうして叶わず、一旦立ち去つた。するとその様子を見ていた婢が湯を用いて皮を剥いてくれた。そこへ姉が歸つてきて皮のとれた胡桃を見て、誰が皮を剥い

たのかと尋ねた。光が自分だと答えると、適まそれを見ていた父池はこれを訶め、厳しく謾語（でたらめ）を戒めた。自來、光は謾語を慎しむようになったという⁽⁶⁾。

このエピソードは父親の厳しい躰の眼が子供たちに注がれていたことを示している。司馬光の幼少年期の逸話には、このように父親の存在を周圍に感じさせるものもあれば、後文に見るように、郷里の家塾の中にいるのを連想させるものもある。このことは父の轉任に従ってその任地で生活を送ったり、或は時に父から離れて郷里で生活することもあったことを意味するものであろうか。

司馬家における初等教育の課程に關しては、六歳で數と方名（東西南北）および書字を、七歳で『孝經』と『論語』を、八歳で『尙書』を誦し、九歳では『春秋』と諸史を讀み、始めてその講義を聞き、十歳では男子は外に出て外傳に就き『詩經』と『禮記』を讀み、その講義を聞く。それ以後は『孟子』『荀子』『揚子』の外、群書を博覽する、という規定があった⁽⁶⁾。

光は六歳の時、父と兄とから『尙書』を學んだが、この書には難解な部分もあり、暗誦はしたもの十分な理解に達しなかった⁽⁶⁾。しかし七歳の時には『春秋左氏傳』の講義を聞き、性に合っていたのか、自房に歸り家人の前でその趣旨を的確に講釋することができた。これ以後、彼は『春秋左氏傳』を愛し、常に書物を手にして飢渴寒暑を忘れるほどであったという⁽⁶⁾。上の規定に照せば、六歳で『尙書』を學び、七歳で『春秋左氏傳』の講義を聞いたのは、二年ほど課程を早めて教育が施されていたことを示すものである。

また、この頃のこととして有名なエピソードが傳えられている。ある日、庭で大勢の兒童と遊んでいる中、一人の兒童が大甕に登り過って甕水中に沒した。他の兒童たちは驚いて皆な逃げ去ったが、光は一人、石でこの甕を叩き割り水を流して友を救ったという。

この話は司馬光が機轉の利く利發な子供であったことを示すと同時に、彼の生得的な性格をも示しているように思

われる。特にこのエピソードを「活人の手段」、すなわち人を活かすの手段と題して傳えた僧惠洪は、司馬光が幼時から貴重な器物よりも人命を尊重する、ヒューマニズムに溢れた人物であったことを強調したかったもののようにである⁽⁹⁾。因みに後年にも司馬家に傳わる一琉璃盞を官奴が碎いた時、これを處罰しようとした人々に對して彼は過ちであるから恕してやるよう取りなしている⁽¹⁰⁾。

これらの逸話は彼が幼時から聡明で温かな、理解力に卓れた人物であったことを印象づける。しかしながら記憶力に關しては、必ずしも人より優れていたとはいえなかったようである。別の傳承によると、

司馬溫公の幼時、記誦の人に如かざるを思う。群居講習するに、衆兄弟既に誦をなして游息すれば、獨り帷を下し編を絶ち、能く倍誦するにおよんで乃ち止む。力を用うること多きものは功を收めること遠く、その精誦するところは終身忘れず⁽¹¹⁾。

という。この傳承内容から推測すれば、司馬家の教育も、中國の傳統的な、暗誦を主體とする學習を基本に据え、輩行を同じくする従兄弟たちを一室に集めて儒學の經典などを講授していたもののようである。この記述を見る限り、司馬光は生れつき拔群の記憶力を誇ったわけではなく、人に倍する努力で記誦を達成したのであり、寧ろ努力の人であつたといふべきなのであろう。この點については、後年のことに屬するが、傳えられる彼の習慣によつても窺い知ることが出来る。すなわち「司馬溫公布衾銘記」⁽¹²⁾に、

其の居處に必ず法あり、動作に必ず禮あり。(中略)一室蕭然、圖書、几に盈ち、終日靜坐して泊如たり。又た圓木を以て警枕とす。小睡すれば枕轉じて覺む。乃ち起きて讀書す。

と見える。讀書の時間を作るために睡眠を減らす工夫までしているのである。

こうした日頃の努力が實を結び、やがて十五歳になると、「書(文獻)に通せざるものなき」までに學業が進み、彼の書く文章も「文辭醇深にして西漢の風あり」⁽¹³⁾と稱賛されるようになった。因みに文體が西漢調であるだけでな

く、その書體も隸書を得意とし、漢人の書法を得たものと評された⁴⁰⁾。

成長した彼の性格を示すエピソードがある。司馬光は二十歳の時、科擧に及第し進士及第者の祝宴（聞喜の宴）に出席した。そこでは及第者は皆な花を戴いて出席する慣例になっていたが、彼はそのような華靡なことが嫌いで、花をつけずにいたところ、同輩に「天子からの賜わりものだぞ。命に違ってはなるまい」と忠告されたので、やむを得ず一枝をとって頭にかざしたという⁴¹⁾。これなどは彼が地味で控え目な性格の持主であったことを示すものである。華靡を好まないのは彼の乳幼児時代からの性癖であったという⁴²⁾が、勤儉節用を宗とする家庭教育の薰陶の成果と見ることもできよう。

注

(1) 馬櫓および顧棟高『司馬溫公年譜』卷一、天禧三年の條には、葉佑之「光山祠記」（『嘉靖光山縣志』所引）を引いて、「公父池爲光山令、十月十八日生公于此」という。

なお司馬光の出生地に關しては光山縣とする説の外、四川・郫縣（張行成「司馬溫公祠堂記」『成都文類』卷三十五）とする説もある。しかし後者は天禧三年十月に池が光山縣にいた事實によつて否定され（胡昭曦「司馬光誕生地考」『四川大學學報（哲學社會科學版）』一九八五年第一期）、夭逝した次兄望の出生地を光のそれと混同していると見る（宋衍審『司馬光傳』三五頁）のが妥當である。

(2) 『乾隆光山縣志』卷十六、光山縣舊署の項には、

縣舊署在朝陽門內、卽今學宮地、爲宋時縣署。天禧間、司馬文正公生署內、有浴兒井尙存、今謂之司馬井。とあり、また葉適「司馬溫公祠堂記」（『水心文集』卷九）には「公、河內人、生於光州、因以爲名」という。

なお光山と光州との關係については、南朝梁の時、光州が置かれて光城を治所とし、隋の開皇十八年、光城を光山と改め舊により光州の治所とした（『光山縣志』沿革志）といい、ともに同地の浮光山に名を取り、州と治所の關係で通稱されている。

(3) 『宋史』卷二九八、列傳卷五十七、司馬旦傳。以下、且に關する記述は、特に注記しない限り、司馬旦傳に據る。

(4) 『書儀』卷四、「居家雜儀」の夾注には、

司馬光の少年期における家庭環境と教育

古有胎教、況于已生子。始生未有知、固學以禮、況于已有知。孔子曰、幼成若天性、習慣如自然。顏氏家訓曰、教婦初來、教子嬰孩。故慎在其始、此其理也。若夫子之幼也、使之不知尊卑長幼之禮、每致侮言父母、毆擊兄弟、父母不可訶禁、反笑而獎之。彼既未辨好惡、謂禮當然、及其既長、習已成性、乃怒而禁之、不可復制。于是父疾其子、子怨其父。殘忍悖逆、無所不至。此蓋父母無深識遠慮、不能防微杜漸、溺于小慈、養成其惡故也。

とある。これを見れば、司馬家の厳しい躾も明確な根拠と積極的な配慮に基づいて加えられたものであることが分かる。

(5) 『邵氏聞見後録』卷二十一に、

予見司馬文正公親書一帖、光年五六歲、弄青胡桃、女兄欲爲脫其皮、不得、女兄去。一婢子以湯脫之。女兄復來、問脫胡桃皮者。光曰自脫也。先公適見、訶之曰、小子何得謾語。光自是不敢謾語。

(6) 『書儀』卷四、「居家雜儀」には、

六歲教之數與方名。男子始習書字、女子始習女工之小者。七歲男女不同席不共食。始誦孝經論語。雖女子亦宜誦之。(中略)八歲出入門戶及卽席飲食、必後長者、始教之以謙讓。男子誦尚書、女子不出中門。九歲男子讀春秋及諸史、始爲之講解、使曉義理。女子亦爲之講解論語孝經及列女傳女戒之類、略曉大意。十歲男子出就外傳、居宿于外、講詩禮傳、爲之講解、使知仁義禮智信。自是以往、可以讀孟荀揚子、博觀羣書。凡所讀書、必擇其精要者而誦之。其異端非聖賢之書傳、宜禁之勿使妄觀以惑亂其志。書觀皆通、始可學文辭。

とある。なお『書儀』は司馬光が後年、司馬家に傳わっていた慣習を經典の記載を参照しながら整理したものであり、光の従兄弟もこの規定に準じて教育を受けていたと考えられる。

(7) 『迂書』序(『傳家集』卷七十七)によれば、「余生六齡、而父兄教之書。雖誦之、不能知其義」とある。唐の歴史家劉知幾がそうであったように、『尚書』は司馬光にも餘り得意な科目ではなかったのであるうか。

(8) 『司馬溫公行狀』(前掲)によれば、

公自兒童、凜然如成人。七歲聞講左氏春秋、大愛之、退爲家人講、卽了其大義。自是手不釋書、至不知饑渴寒暑。年十五、書無所不通。文辭醇深、有西漢風。

(9) 『冷齋夜話』(『津逮祕書』所收)卷三、「活人手段」の項には、

司馬溫公童稚時、與羣兒戲於庭。庭有大甕、一兒登之、偶墮甕水中。羣兒皆棄去、公則以石擊甕、水因穴而迸、兒得不死。蓋其活人手段已見韶龔中。至今京洛間多爲小兒擊甕圖。

と見える。このエピソードは『宋史』卷三三六、列傳卷九十五、司馬光傳にも引用されているが、『冷齋夜話』には「活人手段」として採録しているところに注目すべきであろう。

(10) 許顯『彥周詩話』（『津逮祕書』所收）には、

溫公家舊有琉璃盞、爲官奴所碎。洛尹怒令糾錄聽。溫公區處公判云、玉爵弗揮、典禮雖聞、於往記彩雲易散、過差宜恕於斯人。

とある。

(11) 前節注(12)を参照。

(12) 『范太史集』卷三十六。

(13) 董史『書錄』卷中、「溫國文正司馬光字君實」の條に、

中興小曆云、紹興六年七月、上諭司馬光字盡端勁如爲人、朕恨生太晚、不及識其風采。十一月丙辰、上謂宰執曰、司馬光隸字眞似漢人。近時米芾輩所不可髣髴。朕有光隸字五卷、日夕展玩其字不已。

とあり、黃庭堅『山谷外集』卷九、「論書」には、

比來士大夫惟荆公有古人氣質而端正、然筆間甚過。溫公正書不甚善、而隸法極端勁似其爲人。

と見える。今日に傳わる司馬光の楷書の『通鑑』手稿の一部を見ても黃庭堅の指摘は妥當であるように思われる。もし隸書についての批評も妥當なものだとするならば、光の隸書は、端勁と稱される孔廟碑林の「禮器碑」を想わせる書體だったのであろうか。

(14) 『宋史』司馬光傳には、

仁宗寶元初、中進士甲科。年甫冠、性不喜華麗、聞喜宴獨不戴花、同列語之曰、君賜不可違。乃簪一枝とある。

(15) 「訓儉示康」（『傳家集』卷六十七。『增廣司馬溫公全集』卷一百は「訓儉文」に作る）には、

吾本寒家、以清白相承。吾性不喜華麗、自爲乳兒、長者加以金銀華美之服、輒羞赧棄去之とある。

司馬光の少年期における家庭環境と教育

小 結

華北の、貨幣經濟の比較的低調な農村地帶^①を生活の場とする司馬家には、北魏時代以來の傳統的な生活様式が繼承・維持されていた。司馬氏は晉朝の皇族の後裔であることに誇りを懷きつつも、當時は寧ろこの地域の農村社會の一員としてその安定に積極的に寄與していたもののように見受けられる。

司馬家の家長たちの經營方針を見ると、累世同居の數十人に及ぶ家族員（衆口）の生活をば祖先から繼承した家産・族産を合理的經濟的に運用することによって維持し、一定の枠内での再生産に努めていたことが知られる。「田、廣きを加えず」といい「商賈奇袤の業を爲さず」ともいい、擴大主義を採るわけでもなく、營利に走るのでもなかった。従って一家の生計は俸祿や僅かな餘剩農畜産物の賣買收益などの貨幣所得を家長の下に集中的に管理し、「入を量つて以て出を爲し」「冗費を裁省し奢華を禁止し」、勤儉節用を宗として營まれ、その日常生活は、多數の家族員を律する上でも、儒教の倫理規範に則ったものにならざるを得なかった。

司馬光の人格も幼少年期に、司馬家の作法を受け繼いだ父親の厳しい躰の下に形成された。司馬光自身は父の任地に従うことが多かったから、司馬家の大家族生活にどっぷり浸ることはなかったであろうが、折に觸れてその生活様式にも慣れ、後年、父母の服喪の期間には改めて涑水の司馬家の家族規範に學んで自己の生活信條を確立する。父や兄の薫陶は光に誠實で信義に篤い人格を植えつけたし、大家族の生活での體驗は彼の生得的な才能、利發さや沈着さの上に、思いやりと忍耐の精神とを付與したに違いない。

山西の風土の下、勤儉節用の家風と父兄から育まれた人格とを基に自己の生活信條を修得した司馬光が、江南出身の官僚たちとの政争の中で、郷里の質素で淳樸な農民の生活に想いを致し、華北の農村社會の代辯者となっていくで

あろうことは見易い。後年の司馬光の政見の基本的な立場とその政治姿勢の一端はこの幼少年期の家庭環境と教育に深い関わりをもつものである。

注

- (1) 島居一康「宋代役法の賦課基準について」『島根大學法文學部紀要』文學科編第7號—Ⅰ、1984)は王安石の新法施行期においても免役錢の賦課基準が華北と江南で異なり、華北では田土を含む一切の家産を包括した資産の實直たる「物力」基準が、江南では田土面積及びそれを錢額で表示した「稅産」基準が用いられたことを指摘している。これは華北と江南における貨幣經濟の浸透度の違いが稅制面に反映したものと理解できる。

——文學部教授——